

# 学び手の日常と教育研究を結ぶ

北京日本学研究中心

「日本語教育学特殊研究」の1か月

細川英雄

早稲田大学名誉教員

言語文化教育研究所

八ヶ岳アカデミア

<http://gbki.org/>



# 北京日本学研究中心「日本語教育学特殊研究」(修士課程)集中講義

- 3月17日(金)から4月13日(木)までの一か月間
- 受講者 計12名
  - 教育コース(M1)6名、 研修生 1名
  - 聴講 教育コース(M3)1名、研修生 3名、研修教師 1名

# 科目のねらい

- 主に外国語教育の歴史と現状を実践研究の立場から批判的に検討し、なぜことばを学び／教えるのか、ことばを学び／教えるとは何か、ことばを学び／教えることは、人にとってどんな意味があるのか、といった課題を参加者との議論を通して考える場を提供する。このことにより、参加者それぞれにとっての納得解を形成し、言語教育研究者としての基本的な姿勢を自ら生成することを目的とする。  
（「講義概要」より）

# 背景と設定

- 受講者の多くは、修士論文作成のための研究テーマ設定に強い関心を持つ。
- バイオグラフィ(個人誌)記述をめざす—  
学び手たちの日常の自己意識が、教育研究という領域に載せられて、どのように変容するのか
- 研究テーマ指導をしない理由—自らの明確な問題意識に基づくテーマ動機がなければ持続可能な研究は成立しない。

# 導入と位置づけ

- ことばの教育の分類と種類の意味
- 戦後の外国語教育の歴史と現状
- 自分の学習／教育の位置づけ(配布参照)
- ⇒自分は何故日本・日本語に関心を持ち、どのように日本語を学んできたか。また、どのように日本語を教えていくのか。《過去・現在・未来を結ぶ》

# 活動の手順

- 1 過去・現在・未来を結ぶテーマを語る  
(テーマ動機文の作成)
- 2 対話活動(一人の対話者を選ぶ)
- 3 話し合い(グループ活動)
- 4 結論を—私にとって、このテーマについて考えることの意味
- 5 相互自己評価
- 6 レポート集の作成・編集

# 机の配置

- 教室405は、ゼミ用の四角い口の字型の机の配置
- 前半は、3, 4人のグループ活動を取り入れ、後半は、机を取り払って、椅子だけの円座を組む。
- 最後の相互自己評価は、もとの口の字に戻る。

# 動機記述の難しさ

- なぜ自分の研究動機のもとを振り返らなければならないのか
- 動機を支える、自分の「テーマ」の意味を考えることの難しさ
- 毎回の振り返りを通して気づきが広がる。
- それぞれが、なぜ日本・日本語を学ぶのかという問いに向き合い始める。



# 興味関心の持続可能性

- 日本語は第1志望ではなかった。
- なぜ日本語なのかを考えたことがない。
- しかし、ここまで来るには、いろいろなことがあった。
- 現在の研究とどのようにつながっているのかわからない。
- こんな振り返りを今までしたことがない。

# 教育のパターンリズム

- テーマは学び手の課題
- テーマは、学び手自身の日常の中にあるはず
- テーマは学び手にしか決められない
- 教師がテーマを与えるということ
- 学び手を一人の個人として尊重する意味

# 日本語ペラペラ願望の克服

- ことばの教育の目的は、ペラペラになることか？
- 自分のテーマを持って、ことばで活動すれば、自然にできるようになる。
- 学び手の言語能力向上のみが目的ではないはず。
- <よく考える個人>であることが重要。

# バイオグラフィ活動の意味

- 学び手の興味・関心の掘り起こし
- 日本語学習動機から論文テーマへの軌跡を振り返る
- 問題意識の記述（自分は何に関心があるのか、自分のやりたいことは何か）
- これからの日常への気づき、将来への展望

# ことばの学びとは何か

- ことばの学び手はすべて日本学研究者になるわけではない。
- しかし、日本語を使って何らかの分野で活動することをめざす個人である。
- そして、すべての市民は、ことばの活動者(行為主体)でなければならない。

# 言語習得と活動の関係 —これまでの捉え方—

それぞれの

ことばの活動分野へ

政治・経済・歴史・社会・  
文学・言語・教育…

言語習得

# ことばの活動の場の捉え方

—活動の場をつくることが教育—



# 学び手のテーマとは何か

- テーマとは、個人がそのことばで表現しようとする中身、一人一人異なるもの
- 生活や人生のあらゆる出来事を、私の関わりにおいて、〈テーマ〉として見出し、それを「実践の活動」と捉えることへ
- 自己・他者・社会のあり方を問う対話の作業



# なぜ実践にテーマが必要なのか

- ことばの活動は、学び手の言語能力向上が目的ではない
- テーマによって、意味のあるやりとりが可能になる
- 実践活動には、担当者と学び手の双方にテーマが必要—教師自身が成長し、充実した言語活動主体となるための重要な活動母体概念

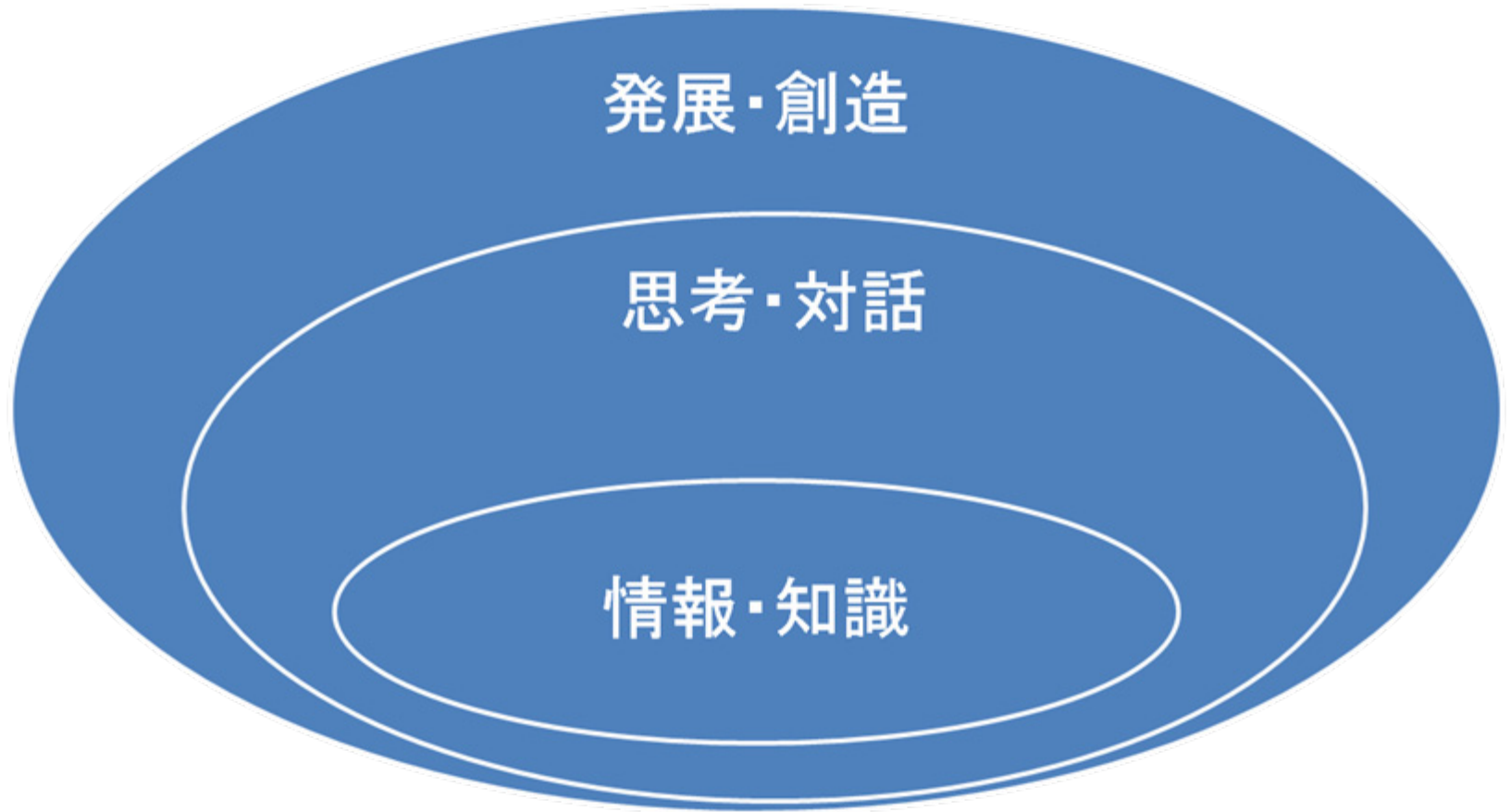
# 自己テーマの発見

- 興味・関心の観察
- 「なぜ私はこのテーマか」という問い
- テーマは一人一人異なる—他者の自由承認
- 対話によって更新されるそれぞれのテーマ
- 他者との協働による新しい日常観

# 評価とは何か

- 正解のある学習／教授（知識・情報）
- ↓
- 正解のない活動（思考・対話）
- ↓
- そして創造的展開へ
  
- これまでの評価は、「知識・情報」の枠内に限定。学びの構造と展開から考える必要性

# 学びの構造と展開



# 評価の考え方

- 「教室は一つの社会」(細川, 2012)
- コンテンツ(内容)・ベースからコンピテン  
ス(力能)・ベースへ(21世紀スキル)
- 力能に優劣はない(それぞれの役割・仕  
事・分担によって全体が成り立つ)
- 一人一人の主観による継続的な討議  
(熟議)の重なり合い
- 段階的・重層的・立体的なカリキュラム  
(序列化を伴わない評価)へ

ありがとうございます

12名の学び手たちとともに

学び手の日常と教育研究を結ぶ

北京日本学研究中心

「日本語教育学特殊研究」の1か月